

コアユ資源予測調査（昭和50年度）

伏木省三・中 賢治・田沢 茂・大野喜弘・水谷英志・的場 洋

本年のアユ苗出荷量は311トンで、漁況展開は平年よりやや良好な状態で終始した。アユ苗出荷終了後からアユの沖すくい網漁業が解禁されたが、その漁獲状況は前年度と同様の傾向を示し、また天然河川への遡上量の減少や遡上アユ体型の小型化も見られ、ハスの肥満度も低下した。¹⁾このように沖すくい網漁業が解禁後短期間内に、上記の現象が2年連続して見られたことは沖すくい網漁業の漁獲強度が高いため、湖中親魚の資源が短期間内に激減するものと考えられる。したがって将来琵琶湖産アユ資源の維持増殖に対して、沖すくい網漁業は憂慮すべき問題となるのではないかと思われる。

本年も湖中親アユ資源の減少に対処して、前年と同様の増殖対策が打ち立てられたが、例年実施する産卵調査区域では、わずか4億9千万粒の産着卵しか認められなかった。

ここに例年にならぬアユの資源学的調査ならびにアユの成育に関連する各種要因、成育状況について調査したのでその結果を報告する。

調査期日

1) 湖中親アユ分布調査 昭和50年8月13日、14日

2) 産卵状況調査

第1次調査 昭和50年 9月 9日、10日

第2次調査 昭和50年 9月19日～21日

第3次調査 昭和50年10月 3日～ 5日

第4次調査 昭和50年10月23日～25日

第5次調査 昭和50年11月11日～12日

3) 氷魚棲息状況調査

第1次調査 昭和50年10月31日～11月2日

第2次調査 昭和50年11月29日～12月1日

4) 動物プランクトン調査

第1次調査 昭和50年10月31日～11月2日

第2次調査 昭和50年11月29日～12月1日

第3次調査 昭和51年 1月 7日～8日

第4次調査 昭和51年 1月28日～29日

第5次調査 昭和51年 2月27日～28日

調査方法

従来の調査と同様の方法で実施した。

調査結果

1) 湖中親アユ分布調査結果

本年度の湖中棲息アユ親魚の魚群出現状況を取りまとめ第1表に示した。

第1表 魚群出現状況

群種	松原 磯沖	天野川 長浜沖	姉川 早崎沖	塩津 湾内	竹生島	海津 知内川	石田川 今津	外ガ浜 安曇川	沖の 白石	多景島	計
大群	0	0	0	0	0	0	0	0	2(18)	1(9)	3
中群	0	0	0	1(3)	1(3)	0	0	0	1(3)	1(3)	4
小群	2	9	3	15	1	1	1	6	1	1	44
計	2	9	3	16	2	1	1	6	4	3	51
小群 換算値	2	9	3	18	4	1	1	6	22	13	79

()内の数字は小群換算値

大群として出現したのは沖の白石で2群、多景島で1群、中群では塩津湾、竹生島、多景島でそれぞれ1群ずつ出現した。小群は塩津湾16群、つづいて天野川→長浜沖で9群、舟木崎沖で5群出現し、その他の水域では1～4群と少なかった。本年の調査結果を過去に実施した結果と比較すると第2表のとおりであり、本年は小群換算値で79群が出現し、過去10年間では中位の値であった。

第2表 年度別魚群出現数の比較

群種	年度	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
大群		0	3	0	∞	0	∞	8	22	1	3
中群		3	3	3		0		8	20	2	4
小群		21	24	20		9		11	50	14	44
計		24	30	23	∞	9	∞	29	92	17	51
小群換算値		33	63	32	∞	9	∞	113	328	31	87

しかしながらこれらの魚群は例年見られない水域、例えば沖の白石や多景島で大群、中群が出現ししかも魚探器に出現した魚群映像が典型的なアユ魚群の映像を示さなかったこと、またこの程度のアユ魚群が出現すれば、湖面を群泳するマキが形成されなくてはならないこと等から、出現した魚群には他魚種の映像もかなり含まれているものと思われた。

沖すくい網漁業解禁直後から産卵期直前までの期間中各地で漁獲されたアユの漁況状況ならびに漁獲アユの体型について調査した。

梅雨期に入って河川水の出水と同時に、湖中棲息のアユは河川へ遡上をはじめ、主要河川では一時豊漁が続いたが、梅雨明けと同時に漁獲は急激に減少し、7月20日以降は殆んどみられなくなった。

一方魰での漁獲も上記と同様の傾向を示し、6月中旬までは平年並で推移したが、その後は減少し7月下旬では魰1統の1日のアユ漁獲量は1Kg程度となった。

沖すくい網漁業では6月20日に解禁されたが、主として舟木崎沖にマキが出現した関係から操業も当水域で行われたが、永續せず7月中旬に終了し操業期間は約20日程度であった。これらの現象は前年度と全く同様であった。¹⁾ 6月中旬以降各地で漁獲されたアユの体型を第3表に示した。

漁具別のアユの体型を見るとヤナ漁獲魚(姉川の四ツ手網も含む)は平均体重で3.50～4.88gであったが、魰漁獲魚のそれは1.47～4.16gで前者の方が大きかった。また場所別では南浜地先の魰の体型が1.47～1.84gで他の水域の魰で漁獲されるものよりも小型であった。

例年この時期に漁獲されるアユの体型は4g以上のものが普通であるが、本年は前年度と同様非常に小型であった。以上の諸現象から本年も産卵期直前の湖中親魚量は前年と同様非常に少ないものと

第3表 漁獲アユの体型

場 所	漁 獲 方 法 " 年月日	平 均 体 重 _g	体 重									
			0.51	1.01	1.51	2.01	2.51	3.01	3.51	4.01	4.51	5.01
			1.00	1.50	2.00	2.50	3.00	3.50	4.00	4.50	5.00	以 上
尾 上	エリ 6月20日	2.68	5	10	7	7	8	8	5	3	3	4
	" 6月29日	1.76	15	20	33	17	10	1	1	1	1	0
	" 7月22日	3.18	1	4	6	8	7	5	2	5	3	3
	" 7月30日	4.16	0	2	7	6	5	6	4	4	2	12
浜 分	エリ 6月23日	2.55	0	13	20	21	19	11	6	4	5	1
	" 7月 4日	2.40	8	6	15	25	22	16	6	2	0	0
南 浜	エリ 6月23日	1.86	9	28	25	24	9	5	0	0	0	0
	" 7月 4日	1.47	18	28	17	8	4	5	1	2	0	0
	" 7月21日	1.63	7	50	29	3	3	1	1	0	1	0
鴨 川	ヤナ 7月21日	3.78	0	0	0	4	5	11	6	2	4	6
石田川	ヤナ 7月21日	4.86	0	0	0	0	2	6	7	8	3	25
安曇川	北流ヤナ 7月21日	3.50	1	5	8	5	9	2	7	4	3	13
	エリ 7月21日	4.88	0	1	1	2	3	6	6	1	3	13
南 浜	四ッ手 7月21日	3.89	0	0	1	6	8	11	14	9	1	10
野洲川	? 7月21日	2.86	1	2	5	11	4	0	2	1	0	3

考えられた。

2) 産卵状況調査結果

a. 河川状況

今年度のアユ産卵期における河川状況は8月23日に来襲した台風6号の影響で県下各地にかなりの降雨があり各河川とも出水した。その後はまとまった降雨もなく各河川は徐々に減水し、第2次調査が行われた9月中旬の水量は非常に少なかった。

第4表 産卵期間中の降雨量 (於 彦根市)

月 日	雨 量	月 日	雨 量	月 日	雨 量	月 日	雨 量
8. 16	6.5	9. 8	4.0	9. 29	31.5	10. 19	0.5
17	5.5	15	8.0	10. 2	28.0	24	18.0
18	16.0	16	15.0	3	20.0	28	7.0
19	0.5	18	21.5	5	23.5	29	18.0
22	28.0	22	39.0	7	17.0	30	1.5
23	61.5	23	89.0	8	22.5	31	3.0
30	3.5	24	1.0	12	13.0	11. 6	6.5
9. 1	1.5	27	1.0	17	4.5	7	20.5
5	17.0	28	1.0	18	37.5		

(彦根地方気象台)

しかしその後はかなりの降雨がしばしばあり各河川の水量は増加し、産卵環境は再び良好となった。

8月23日の多量降雨の出水で、産卵初期には産卵に良好な河床状態となったが、第2次産卵調査時には、河川水量は少なくなり産卵床に藻類の着生や浮泥の沈積が見られ、産卵環境は良好と云えない

状態となった。その後はしばしばの降雨で河川水量は多くなり、河川の状態は産卵初期の様な状態に回復した。

b) 産卵状況

例年産卵期になると出水直後から湖中より大量の親魚が遡上し、各河川とも産卵場附近では相当量の親魚が見られるが、第1次産卵調査時に親魚が散見されたのは、わずか石田川、天野川、犬上川の3河川で、その他の河川では殆んど見られなかった。第2次調査時には9月16日から各河川に放流された親魚がかなり見られたが、10月22～23日の降雨による出水で放流親魚は湖中に降下したものの、第3次産卵調査以降は各河川とも散見される程度の親魚量に減少した。

調査次別、河川別に産卵量を取りまとめたのが第5表である。

第5表 河川別調査次別産卵量 (×1000粒)

河川名	第1次	第2次	第3次	第4次	第5次	計
安曇川南流			12,429	364		12,793
石田川	1,370	7	4,460	43,903		49,740
姉川		42,626	73,949	10,710	10,635	137,920
天野川		14,044	2,724	2,149	102	19,019
芹川		2,637		10,700		13,337
犬上川	1,106	135,923	550	57,571	6	195,156
愛知川		714	523	29,845	19,480	50,562
計	2,476	195,951	94,635	155,242	30,223	478,527

第6表 調査次別産卵状況

調査項目	第1次	第2次	第3次	第4次	第5次	計
調査月日	9/9～10	9/19～21	10/3～5	10/23～25	11/11～12	—
産卵河川数	2	6	6	7	4	—
総産着卵数	2,476 千粒	195,951	94,635	155,242	30,223	478,527
有効産着卵数	2,440 千粒	185,778	91,389	141,284	26,725	447,616
産卵場面積	69.0 m ²	861.5	1,023.0	1,561.0	110.5	3,625.0
産着卵密度	36 千粒/m ²	227	92	99	273	132

各調査時別の総産着卵数は第1次、200万粒、第2次1億9,500万粒、第3次9,000万粒、第4次1億5,500万粒、第5次3,000万粒で計4億8,000万粒であった。

今年度の産卵開始時期は例年にくらべ約15日遅い9月中旬前半で、産卵盛期は第2次調査を実施した9月中旬後半から9月下旬前半と考えられた。

河川別の総産着卵数は犬上川の約2億が最も多く、つづいて姉川の1億4000万粒、石田川、愛知川では約5,000万粒で、その他の河川では1,000～2,000万粒と少なかった。

9月16日から第5種漁業権区域内での親魚の漁獲禁止処理がとられたが、その時点の残存親魚量も不明であり、またこれらの親魚は産卵調査区域以外の上流域で主として産卵したので、その産卵状況も不明であった。

第7表 年度別産卵量の比較

(×1,000)

項目\年次	40	41	42	43	44	45
総産着卵数	1,413,942	758,041	748,435	1,121,949	709,429	590,595
有効産着卵数	1,350,094	740,021	704,719	1,080,699	588,350	549,148
産卵場面積	264,647 ^{m²}	8,040	7,567	10,383	6,922	6,128
産着卵密度	53千粒/ ^{m²}	94	99	108	102	96

項目\年次	46	47	48	49	50
総産着卵数	54,912,679	1,753,539	3,133,608	1,540,497	478,527
有効産着卵数	51,379,556	1,692,724	2,788,404	1,489,747	447,616
産着場面積	253,046 ^{m²}	15,110	13,885	7,132	3,625
産着卵密度	217千粒/ ^{m²}	116	226	216	132

今年度の総産着卵数は過去10年間で最低の産卵量であった昭和45年の5億9000万粒より更に約1億1,000万粒少ない4億8,000万粒で史上最低の産卵量となった。この原因の一つは産卵に参加した湖中棲息のアユ親魚が非常に少なかったことによるものと考えられるが、天然河川に放流された養成親魚の一部が出水と同時に琵琶湖に降下し、それ以降、天然河川内の放流親魚は散見される程度に減少し、増殖効果が顕著に現れなかったことも一つの原因と考えられる²⁾。琵琶湖に降下したアユ親魚は小糸網や罟等で一部漁獲されるが、漁獲されなかった親魚は再び遡上して産卵に参加するものと考えられるが、本調査ではこの状態を正確に調べることは出来なかった。

この問題は今後湖産アユの増殖を行う上で非常に重要であるので、早急に検討するとともに、増殖効果を向上させるための諸問題を明かにする必要がある。

3) 氷魚棲息状況調査結果

第1次、第2次調査における氷魚の採集尾数を水域別にとりまとめるとともに、過去7年間の成績と比較した(第8表)。

第8表 水域別平均採集尾数の年別比較

水域\年次調査	43		44		45		46		47		48		49		50	
	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
南浜沖	9	53	22	23	13	4	219	132	321	119	604	309	157	58	406	274
塩津湾	27	14	43	15	19	1	147	140	150	52	106	42	133	77	144	132
竹生島周辺	61	24	37	14	20	0	437	161	161	94	296	298	109	111	304	41
海津知内沖	40	30	10	4	4	21	160	183	98	57	173	46	149	68	161	88
今津沖	28	60	25	17	27	9	104	330	40	31	29	29	185	87	627	80
舟木大溝沖	30	18	76	36	76	4	433	488	78	22	75	23	210	76	282	207
北小浜舞子沖	30	17	141	13	51	43	184	343	95	13	54	54	477	55	242	98
木戸和邇沖	74	17	26	16	169	25	275	207	126	65	327	61	195	431	402	138
全水域	37	29	47	17	52	13	245	248	133	57	208	104	202	120	321	132
比率※	28	35	36	20	39	15	186	295	101	68	158	124	153	143	243	157

※ 過去7年間の平均採集尾数(第1次132尾,第2次84尾)に対する比率

第1次調査では1曳網当りの平均採集尾数は321尾、今津沖、南浜沖、木戸和瀬沖が400～600尾で最も多かった。また第2次調査では132尾の平均採集尾数で、南浜沖、舟木大溝沖が200～270尾と最も多かった。

今期の水魚の棲息密度を過去7年間の1曳網当りの平均採集尾数の平均値に対する比率で現わすと第1次調査243%，第2次調査157%で例年に比較して高い密度であった。

4) 環境条件調査結果

孵化仔魚が琵琶湖に降下して湖中に棲息するようになる9月から翌年の3月までの湖心部の水温を第9表に示した。

第9表 琵琶湖の水温変化（湖心部℃）

水深 月水温	9		10		11		12		1	
	水温	平年差	水温	平年差	水温	平年差	水温	平年差	水温	平年差
0 m	26.8	+2.6	20.2	+0.7	15.4	+0.1	11.0	-0.5	8.0	-0.1
10	22.9	-0.1	20.2	+0.6	15.3	-0.2	10.9	-0.7	7.8	-0.5
20	12.9	-1.0	20.1	+3.9	15.3	-0.2	10.8	-0.8	7.8	-0.5
30	9.4	-0.9	11.4	+1.0	8.7	-2.9	9.2	-2.2	7.8	-0.5
40	7.9	-1.0	8.3	-0.7	7.5	-1.9	7.6	-2.3	7.6	-0.7

湖心部の水温は11月から2月にかけては平年を下廻る値で推移したが、3月には平年値にもどった。

アユの主要餌料である動物プランクトンのうち大型のものの量的変化を第1図に示したが、10月下旬 10.3×10^3 N/ m^3 でこの時期では例年よりやや少ない量であったが、11月下旬には、 6.4×10^3 N/ m^3 となり、この間の現存量の減少率は例年より低く平年並の量となった。

その後は1月上旬 6.9×10^3

N/ m^3 、1月下旬 $3.15 \times$

10^3 N/ m^3 、2月下旬 3.65

$\times 10^3$ N/ m^3 、3月下旬

1.86×10^3 N/ m^3 と変化した。

一方小型動物プランクトンでは10月下旬 11.6×10^3

N/ m^3 、11月下旬 4.6×10^3

N/ m^3 、1月上旬 0.9×10^3

N/ m^3 、1月下旬 0.66×10^3

N/ m^3 、2月下旬 1.07×10^3

N/ m^3 、3月下旬 0.92×10^3

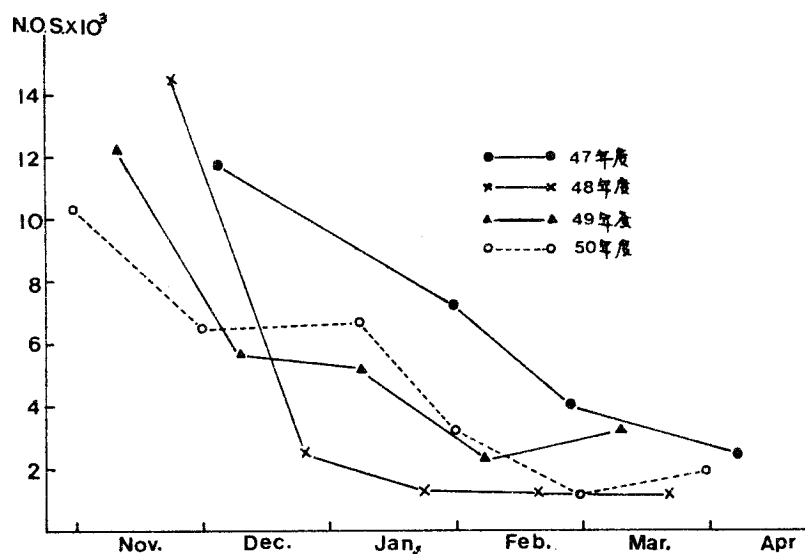
N/ m^3 と変化した。10月下旬

から1月下旬にかけては大型

動物プランクトン量の減少より

も急減した。

昭和48年度の大型動物プ



第1図 大型動物プランクトンの量的変化

ランクトン量の変化は11月から12月にかけて急激な減少を示し、それ以降は $1.0 \sim 1.5 \times 10^3$ N/ m^3 と非常に低い現存量で推移したが、本年度の場合は49年と略同様の減少傾向を示しているの
で、アユの餌料状態はやゝ良好であると云える。

5) 成育状況調査結果

氷魚棲息状況調査で漁獲された氷魚の大きさを水域別に第10表に示した。第1次調査時の全水域の採集魚の平均体型は全長で 2.19 ± 0.01 cm、体重では 29.7 mgであり、また第2次調査ではそれぞれ 2.56 ± 0.01 cm、 54.7 mgであった。

第10表 氷魚棲息状況調査で漁獲された氷魚の体型

調査次 測定項目 水 域	第 1 次						第 2 次					
	全 長 (cm)			体 重 (mg)			全 長 (cm)			体 重 (mg)		
	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均
南 浜 沖	3.02	1.25	2.36	109.1	2.5	27.8	4.48	1.63	2.70	361.9	2.0	55.2
塩 津 湾	2.95	1.20	2.15	99.0	2.7	29.1	4.12	1.65	2.68	311.0	5.7	64.5
竹生島周辺	3.12	1.25	2.11	110.0	3.9	25.2	3.95	1.45	2.67	258.1	3.4	55.9
海津知内沖	3.48	1.20	2.15	175.7	1.5	27.9	4.12	1.75	2.72	281.2	8.2	68.1
今 津 湾	3.75	1.32	2.24	235.6	2.4	34.1	4.60	1.18	2.66	525.8	7.3	67.6
舟木大溝沖	4.10	1.18	2.42	314.4	4.8	36.4	4.18	1.80	2.60	328.5	2.7	62.3
北小松舞子沖	3.68	1.40	2.14	229.2	2.9	28.8	4.12	1.34	2.33	301.2	3.5	33.7
木戸和邇沖	3.68	1.40	2.17	211.1	1.6	28.8	3.80	1.55	2.32	259.0	6.0	33.6
全 水 域	4.10	1.20	2.19	314.4	1.5	29.7	4.60	1.18	2.56	525.8	2.0	54.7

第11表 平均体型の年次別比較

年 度		43	44	45	46	47	48	49	50
全 長 (cm)	第1次	2.45	2.38	2.42	2.82	2.32	2.56	2.49	2.19
	第2次	3.57	3.00	3.16	3.24	2.91	3.04	2.94	2.56
体 重 (mg)	第1次	55.6	57.8	56.9	84.4	32.2	64.4	47.3	29.7
	第2次	210.9	124.8	144.9	188.6	97.1	136.3	87.1	54.7

第2次調査における採集魚の水域別の体型は海津から舟木にかけての水域及び塩津湾で平均体重が62～68 mgで他水域よりも大きく、南浜竹生島周辺の55 mgがこれにつぎ北小松和邇沖では33 mgと小さかった。本年度の氷魚の棲息状況調査は月令の関係で約15日早く実施したので、年度別の体型を比較する場合第9表の値をそのまま比較することは出来ないが、第2次調査時の平均体重は54.7 mgで、15日間の成長を考慮しても今年度の成育は劣るものと考えられる。

12月に入って各地の魰等で漁獲されたアユの体型について調査した結果を第12表に示した。今年度は浜分ならびに今津の魰で1.3～1.8 g、1.7～2.1 gの大型のアユが漁獲されたが、尾上、四津川→堅田の水域の魰漁獲アユは1 g以下の小型魚であった。浜分の魰漁獲アユの体型は49年度よりも大型で、48年度と同程度と考えられるが、尾上では48年度、49年度よりも小さく、また四津川→堅田の水域では48年度よりも小さく、49年と同程度の体型であった。今年度のアユの成育の良否の判定は上記のように水域によって差が見られるので困難であるが、全般的に見ると昭和48年度よりは悪く、49年度と同程度の成育と考えられる。

第12表 各地で漁獲されたアユの大きさ(φ)

漁獲場所	漁具	50年度	49年度	48年度	47年度
湖心部	中曳	0.37 (?) 0.84 (1/4) 0.42 (?)	1.13 (12/9) 1.96 (1/5)	0.97 (12/3)	0.91 (12/4)
尾上	魬	0.89 (12/21) 0.99 (12/30) 0.82 (1/7) 0.90 (1/14)	0.95 (12/9) 1.01 (12/24) 0.73 (12/26) 1.13 (1/7) 1.07 (1/14)	1.35 (12/13) 0.99 (12/18) 2.18 (1/6) 1.70 (1/17)	0.93 (1/17)
北舟木	魬		1.69 (1/7) 2.60 (1/14)	1.43 (12/13) 1.45 (12/23)	
浜分	魬	1.85 (12/19) 1.32 (1/11)	1.12 (12/29) 1.30 (1/5)	1.45 (12/25) 2.21 (1/21)	1.65 (1/10)
四津川 堅田		0.84 (12/19) 0.88 (12/25) 0.51 (12/28) 0.90 (1/16)	0.69 (12/31) 0.92 (1/5) 0.83 (12/31) 0.67 (1/5)	1.03 (1/18) 1.32 (1/10)	0.97 (1/18) 1.40 (1/18)
今津	魬	2.10 (12/30) 1.94 (1/4) 1.80 (1/8) 1.95 (1/11) 1.72 (1/16)			

(いずれも平均値)()月/日

12月から1月にかけて魬漁獲量の聴込み調査では、春アユの漁獲が順調であった47年度、48年度の漁獲量よりも少なく、49年度並かそれよりやゝ悪い状況であった。

考 察

過去の資料から春アユ漁況に関連する要因を検討すると、産卵量、氷魚の棲息密度等の資源調査の結果は漁況と相関的でなく、むしろ漁獲アユの体型や肥満度、産卵初期の産卵量の多少、冬期に漁獲される量等と相関があるようである³⁾。このことはアユ苗出荷が重量で取引きされること、また成育の良否が接岸時期に影響し、その結果が漁獲に反映するためと推察される。

今年度の氷魚棲息密度は7年間の1曳網当りの平均採集尾数に対して、第1次24.6%、第2次15.7%で資源量はあまり問題性はないようであるが、魬漁獲アユの体型が48年度よりも小型で、49年度と同程度の大きさであり、また氷魚の棲息状況調査で採集した氷魚の大きさが、例年より小さいことから考えると、今年度の成育は豊漁年であった48年度(漁獲年は49年)より劣り、49年度(漁獲年50年)と同様か、それよりもやゝ悪いものと推定される。動物プランクトン量は例年並に推移しているのでアユの発育に対して餌量生物量はあまり問題にならないと思われる。

上記の調査結果から今期の春アユの漁況を予測すれば44年、48年のような良好な漁況展開や昭和41年、47年のような不漁年となる可能性は殆んどなく、前年度のように平年並か、それよりやや悪い漁況になるのではないかと考えられる。

要 約

1. 産卵期直前に行った魚探調査で79群が出現した。出現数は例年並の成績であったが、魚群の出現水域が例年と異なり、また漁群映像が典型的なアユ魚群のそれと異ったこと等から他魚種の映像もかなり含まれているものと考えられた。
2. 6月20日に沖すくい網漁業が解禁され、解禁当時は浮上群は多数見られ漁獲も好調であったが7月中旬には浮上群は見られなくなり、この漁業は漁期なかばで終了した。これに前後して魴の漁獲量や天然河川への遡上量も減少し、体型も小型となり、湖中親魚の資源枯渇の様相を示した。
3. 天然河川での総産着卵数は約4億8,000万粒で、例年に比較して少ない産卵量であった。産卵量が少なかったのは湖中親魚が少なかったことも大きな原因であるが、放流された養殖親魚の一部が琵琶湖に降下し、増殖効果が顕著に現れなかったことも一つの原因と考えられる。
4. 例年に比較して少ない産卵量であったが、氷魚の棲息密度は第1次調査321尾/1曳網、第2次調査132尾/1曳網で例年より高かった。
5. 動物プランクトンの量的変化は昭和49年と同様の推移であり、餌料不足による発育の遅れは見られないと考えられる。
6. 氷魚棲息状況調査で採集された氷魚の大きさは、第1次調査では全長 2.19 ± 0.01 cm、体重 29.7 mg 第2次調査ではそれぞれ 2.56 ± 0.01 cm 54.7 mg で、発育は例年よりも劣った。各地のエリで漁獲されたアユの大きさは昭和48年度よりは小型で、49年度と同程度の大きさであった。
7. 以上の調査結果から今年度の春アユの漁況を予測すれば、49年のように平年並かそれよりやや悪い漁況展開になるのではないかと考えられた。

文 献

- 1) 伏木省三他 1977: コアユ資源予測調査(昭和49年度) 本誌
- 2) 伏木省三, 中賢治他 1976: 産卵アユ親魚の河川放流後の湖中降下について, 滋賀水試研報 №.28 29~32
- 3) 伏木省三, 中賢治 1975: 琵琶湖産春アユの漁況予報に関する考察 滋賀水試研報 №.27 26~